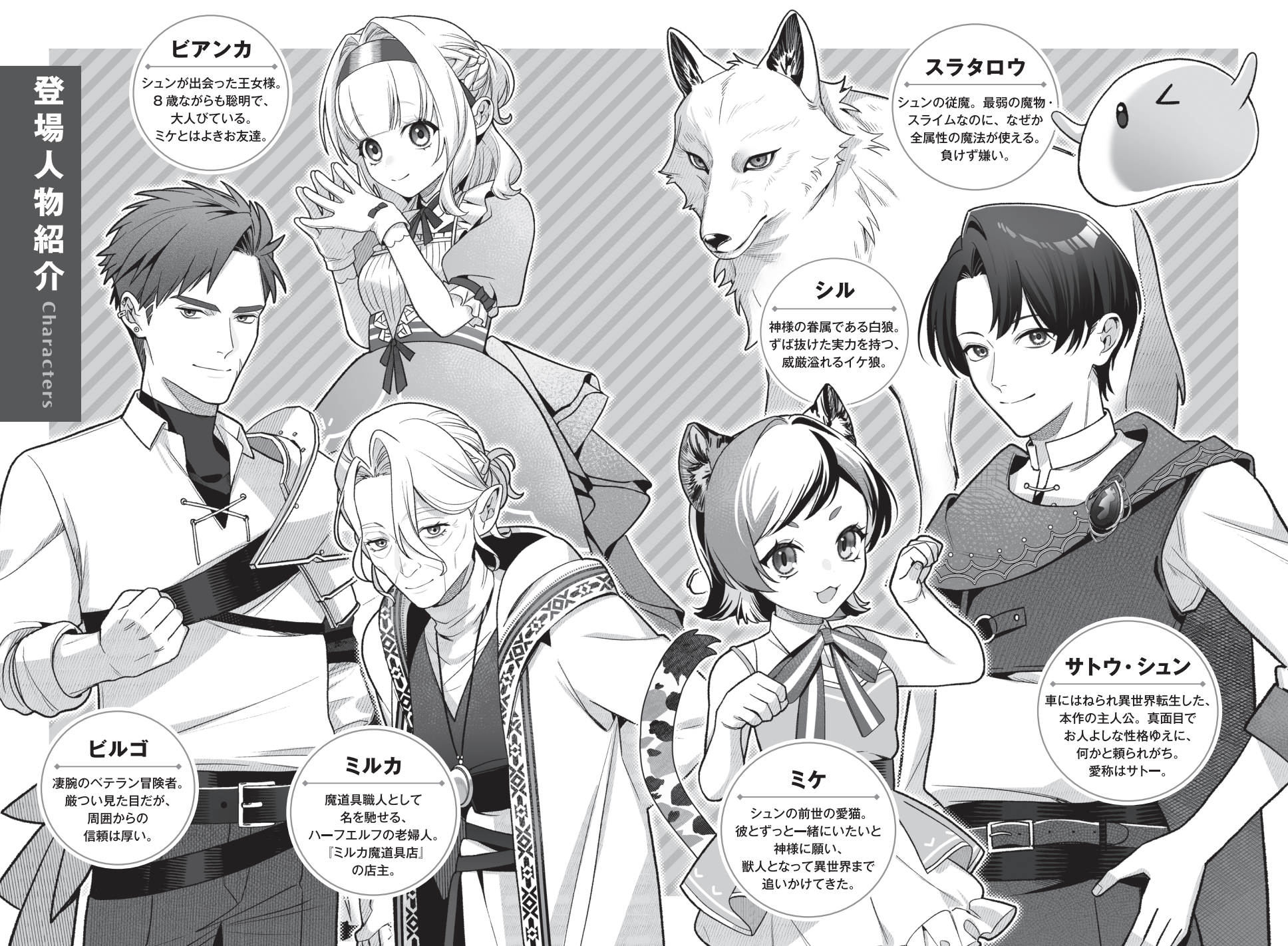


異世界転生したので、のんびり冒険したい！

著 藤なごみ　画 小野おのこ



登場人物紹介 Characters



ビアンカ
シュンが出会った王女様。
８歳ながらも聡明で、
大人びている。
ミケとはよきお友達。

スラタロウ
シュンの従魔。最弱の魔物・
スライムなのに、なぜか
全属性の魔法が使える。
負けず嫌い。

シル
神様の眷属である白狼。
ずば抜けた実力を持つ、
威厳溢れるイケ狼。

サトウ・シュン
車にはねられ異世界転生した、
本作の主人公。真面目で
お人よしな性格ゆえに、
何かと頼られがち。
愛称はサトー。

ビルゴ
凄腕のベテラン冒険者。
厳つい見た目だが、
周囲からの
信頼は厚い。

ミルカ
魔道具職人として
名を馳せる、
ハーフエルフの老婦人。
『ミルカ魔道具店』
の店主。

ミケ
シュンの前世の愛猫。
彼とずっと一緒にいたいと
神様に願い、
獣人となって異世界まで
追いかけてきた。

第一章　新しい世界と人助け

「あれ？　ここはどこだ？」
いつの間にか寝ていたみたいだ。
気がつくと、俺はまったく見覚えのない場所……というか空間にいた。
周囲が真っ白な中、目の前には教会の祭壇みたいなものがある。ここはいったいどこだろう？
「おーい、誰かいるかー？」
シーン。
周囲に声をかけても、反応はまったくなかった。
ここは、いったいどこなんだ？
目をつぶって気持ちを落ち着かせる。ここに至るまでの出来事を、思い出してみよう。

俺は独身で、もうすぐ三十路のサラリーマン。
両親はすでに他界しており、兄弟もいないので血縁者はいない。至極残念ながら、過去に彼女がいたこともない。
ブラック企業に勤める俺は、いつも社畜のように働いていた。こんな歳なので、後輩もできた。

「じゃあ、先に帰るぞ」
「佐藤先輩、お疲れ様です」
今日は金曜日だったので、いつもどおり終電近くまで働いた俺は一足先に上がることにした。
ちなみに後輩は、明日は彼女とデートらしい。決して羨ましいとは言わないぞ。
モテとは縁遠い人生を歩んできた俺は、たまの休日に猫カフェを訪れ、猫に癒される日々を送っている。
なぜか昔から動物に好かれる気質で、実家の近所にいたよく吠える犬さえ、俺が通りがかると頭を撫でろと尻尾をぶんぶんと振って近寄ってきた。
猫カフェでも、入店した瞬間から猫まみれになったなあ。
しかしそんな俺にも数カ月前から、家族と呼べる存在ができた。
三毛猫のミケである。
というのも、件の猫カフェを訪れるたび俺は体の小さな三毛猫に絡まれており、俺がいないとあまりに寂しそうだから……と言う店員の勧めで、いつの間にか彼女を引き取ることになってしまったのだ。
ミケがやってきて、俺の日常はグッと楽しくなった。
なんとか有休を取ってソロキャンプに一緒に行ったり……
自慢じゃないが、俺はそれなりに料理ができる。残念ながら、女性に得意料理を披露する機会はなかったが。

猫連れのキャンパーは珍しく、周囲から遠巻きにされたが、俺はまったく気にしなかった。
ミケはとても賢く、リードをつけなくても遠くに行くことはなかった。
その日、ボロアパートに帰りついた俺はさっそくキャットフードを用意した。
スーツから普段着に着替えて適当な飯を作り、ミケと食卓を囲む。
「おいしいか？　ミケ」
「ミィ！　ハグハグハグ」
「うーんと……今日はこれを見ようか。ミケの好きなアニメの続編だ」
「ミィ～！」
ブラック企業勤めとはいえ、恋人がいない俺は幸いにして一人の時間がそこそこあった。
俺はミケを膝に抱きながら、アニメやドラマなどをゆっくり眺める時間が好きだ。
ミケはアニメに興味があるらしく、バトルシーンではテーブルの上に乗って大興奮することもあった。
どうやら猫カフェでもテレビを見る機会があったようで、アクションものがとても好きらしい。
アニメを見終えた頃、ちょうど酒が切れたのでコンビニに買いに行くことにした。
「ミケ、一緒に出かけようか」
「ミィ！」
支度を終えてかがむと、ミケは元気な返事をしてパーカーのフードの中にちょこんと飛び込んだ。
ここが彼女の指定席で、外に行く時は必ず入ってくるのだ。

ミケは外に出るのも大好きなのだ。
「おっ、今日もいたな」
「アオン」
「ミィ」
アパートを出るとすぐ、しばらく前から姿を見かける白い子犬が足にすり寄ってきた。
人懐っこい子なので、おそらくアパートの住人の飼い犬だろう。
俺がしゃがむとミケもフードから降りて、子犬に体をすりすりした。
子犬の頭を撫でつつ、買い置きのドッグフードを与える。いつもおいしそうに食べるから、飼い主からあまり餌をもらえていないのかもしれない。
やがて食事を終えた子犬に別れを告げ、俺はミケを抱き上げてアパートの敷地を出ようとした。
その時だった。
キキー、ドン！
目の前の交差点で、車同士の衝突事故が起きて……
「うぉ、マジかよ！」
「ミィ！」
「アオン！」
眩しい明かりが猛スピードで迫りくる中、俺はミケと足元にいた子犬を遠ざけようと咄嗟に手を伸ばし――

そこから先のことがまったく思い出せない。
もしやあの迫ってきた明かりは、事故を起こした車のヘッドライトだったのでは？
もしかして、俺は車にはねられて死んだのか？
「そうです。あなたは車にはねられ、残念ながら亡くなりました」
「うお、ビックリした！」
目の前がピカーッと光ったと思ったら、天使のようなローブを羽織った女性が現れた。
享年二十九歳、俺はやっぱり死んだのか。
とすると、ここはどこだろう？　もしかして、あの世？
「いいえ、ここは私の領域。私は、あなたの世界でいう神様みたいなものだと思ってください。サトー。あなたは自らの危険を顧みず、私の眷属を自らの身を挺して車から守ろうとしましたね」
俺の内心の疑問を読み取ったらしい神様（？）は、後光が差していて表情は窺えない。ただ、なんだか申し訳なさそうな声色だ。
それにしても、『眷属』っていったいなんのこと……
「ウォン！」
「うわ、何!?　……うん？　大きな犬……もしかしてオオカミか？」
突然、神様の横に大きな白いオオカミが現れた。
大型犬として有名なシベリアンハスキーよりも、ずっと大きい。

「彼こそ、私の眷属。眷属なので死ぬことはありません。しかし地球に下りた際、いつも世話を焼き、最期は身を挺して守ってくれたことに感銘を受け、こうしてあなたの魂を私のところに連れてきたのです。今も、あなたは極上の撫でスキルの持ち主だと言っています」

まだ絶賛混乱中だが、情報を整理しよう。

神様の発言から推察するに、おそらくアパートに現れていたあの白い子犬は、目の前にいる大きな白いオオカミだったのだろう。

子犬の時は愛くるしかったのに、今は凶悪な顔つきになっちゃって……

「ここに来たことで、あなたの魂は元の世界の管理を外れてしまいました。我が眷属のしたこととはいえ、申し訳ありません。このままではあなたの魂は永久に彷徨うことになります。そうならないように、あなたを元いた世界から新しい世界へ移すことにしました」

話を聞く限り、どうも拒否権はなさそうだ。

新しい世界とは、いったいどんな世界だろうか。

うーん、情報がなくてさっぱりわからん。

「我が眷属も、あなたと共に新しい世界へ行きたがっています。責任を取らせるためにも、どうか連れていってくれませんか？」

ジー……

神様が提案してくる一方で、オオカミからとっても熱い視線が……まあ、しょうがないかな。

「一緒に来るか？」

ブンブンブン！

おお、オオカミの尻尾が大きく揺れている。こうして見ると、結構可愛いな。

「新しい世界に行くにあたり、役に立つ力をいくつか授けましょう。詳しいことは、新しい世界に着いたあとに手紙で説明します。ゆっくりと過ごしてください」

ここ最近はキャンプにも猫カフェにも行く時間がまったく取れず、心身が疲弊しきっていた。ブラック企業の凄まじさが、改めて身に染みていたところだ。

そういう意味でも、ゆっくりと心身を休めつつ異世界をぶらぶらする、なんてのもいいかもしれない。

「サトーシュンさん、あなたに幸が多からんことを」

神様がピカーッと光り、俺の意識が遠のいていく。

そういえばミケはどうなったのだろう。子犬が無事なら、彼女も元気なはずだけど……

そう思いつつ、俺は意識を失ったのだった。

❖ † ❖

ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

風が木々を揺らす音と、日差しの温もり。

心地よい感覚の中、俺は目覚めた。

「うーん……ここが新しい世界か」
街道と思しき整備された道の端にある木に、俺は座って背を預けていた。
服装は事故に遭う前に着ていたパーカーではなく、動きやすいカジュアルなシャツとズボン、マントに、ブーツみたいな革靴だ。
俺の右脇には、例の神の眷属だという真っ白なオオカミがグーグーと寝そべっていた。
神様の領域？　とやらにいた時より体が小さくなっており、今のサイズは大型犬くらい。何やら紙を咥えているようだ。
オオカミの体を撫でてみると、想像通りのもふもふな毛並みだった。
「さて……」
立ち上がろうとして、何かが俺の足の上に乗っていることに気づく。
視線を下げると、俺の膝の上で猫耳が生えた六歳くらいの女の子がすやすやと寝息を立てていた。
白と黒のメッシュが入った茶髪のおかっぱに三毛柄の耳が生えており、真っ白なワンピースから三毛柄の尻尾がぴょこっと覗く。
「えへへ、お兄ちゃん……大好き……」
わーお、何かキケンなことを喋っているぞこの猫耳幼女。
普段なら猫耳と見るや否や頭を撫でたくなってしまう俺だが、今ばかりは汗がダラダラと流れていく。
俺は異世界に来て早々、何かやってしまったのだろうか……

いや、そんな記憶はない。多分潔白だ。
そもそも、俺は異世界に転生したばかりだ。何もしていないはずだ。
「ううう……？」
俺がもぞもぞと動いたためか、猫耳少女がパチリと目を覚ました。
「うーん……あっ、お兄ちゃんだ！」
目を覚ました彼女は、満面の笑みで俺の胸に飛び込んだ。そして頭をぐりぐり押しつけてきた。
「えへへ、お兄ちゃんの匂いだ！」
そのまま、うっとりしながら俺の匂いを嗅いでいる。
いったい何が起きているんだ？　俺はますます混乱した。
思わず猫耳少女を抱きしめようとして、なんとか手を止める。
パカパカパカ。
その時、何かの足音が聞こえ、すぐそばでピタリと止まった。
顔を上げると、豪華な外観の馬車が街道に停まっていた。
馬車の窓が開いていて、貴族っぽい服装のふくよかな男性がこっちを見ている。
馬車の前後には、騎士服を身につけた人たちがいた。
そうだ俺、異世界の道端で起きたんだった。
……あれ？　もしかして、猫耳幼女に抱きつかれているところを、ばっちり見られている？
それはあらぬ誤解を生むような……

馬車の御者も、馬車に乗る高貴な男性も、騎士たちも、微笑ましいと言わんばかりの表情で俺たちのことを見ている。

「「ヒヒーン」」

おい、馬までニマニマしているのかよ！

「えへへ、お兄ちゃん……」

猫耳幼女は、相変わらず満面の笑みを浮かべて俺にくっついたままだ。

もしかして、馬車が停まったことにも気がついていないのかも。

ピュー……パカパカパカ。

俺たちの間を風が吹き抜け、馬車は何事もなかったように動き出した。

馬車の走る音が遠ざかり、まったく見えなくなる。

……俺の異世界での評判、出だしで終わったかもしれない。

【ふわー……よく寝たぞ。おや？　主人よ、なぜ頭を抱えているんだ？】

眷属のオオカミがむっくりと起き上がり聞いてきたが、こちらはいろいろなダメージがあって頭が痛い。

まさか、いつぞや見たアニメみたく、第一異世界人に猫耳幼女に抱きつかれているところを目撃されるとは……

【うん？　何があったのかよくわからないが、上の者より手紙を預かっているぞ】

そうだよな。ぐーすか寝ていたオオカミは、俺の苦悩など何も知らないだろうな。

「そういえば、お前の名前はなんて言うんだ？」

【我が名は『シル』だ。主人よ、よろしくだぞ】

シルと名乗ったオオカミから、神様からの手紙を受け取った。

うん。シルが咥えていたから、手紙が涎で濡れている。

「お兄ちゃん……」

あっ、そういえば猫耳幼女にまだ抱きつかれたままだった。

「えっと……君の名前は何かな？　どこから来たの？　親御さんは？」

「ミケは『ミケ』だよ！　お兄ちゃんがつけてくれたんじゃない！」

おお、俺は初対面の猫耳幼女に名前をつけていたのか……いつの間に？

とりあえず、手紙を読まないと。

「ミケ、お兄ちゃん手紙を読みたいから、少し離れてくれないかな？」

「えー、わかったよ……」

ミケと名乗った少女は渋々ながら離れてシルのそばに移動した。

これでゆっくり手紙を読める。俺は手紙を開封して中身を読み始めた。

サトーさんへ

異世界転生に同意してくださり、ありがとうございました。

簡単ですが、この世界について説明します。

現在サトーさんがいる世界は、地球とは大きく異なります。
まず、魔法があります。
適性によりけりですが、この世界に住んでいるほとんどの生物は魔法を使えます。
サトーさんにとってわかりやすいものでたとえると、一種のゲームに近いです。
魔導書を読んだり、他の人から教わったりすることで魔法が使えるようになります。
ただし、素質がない属性の魔法は使えません。
サトーさんもいきなり魔法は使えないので、頑張って覚えてください。
次に、魔物がいます。
これは魔素と呼ばれるものの影響で、普通の動物が変化した存在です。
ドラゴンのような強力な魔物もいますので、旅をする際は充分なご注意を。
そして、いろいろな職業があります。
この世界には、食堂や宿屋といった地球にもあった職業の他に、
冒険者や武器職人といったいろいろな仕事があります。
最初は冒険者として依頼を受け、お金を貯めるのがいいでしょう。
どこかの国で取り立てられて、貴族や王様になったりするかもしれませんね。
最後に、さまざまな種族がいます。
人間の中にも、獣人やエルフといった人族とは異なる種族がおり、
それぞれ独自の文化を持っています。

サトーさんなら心配不要かと思いますが、異種族とも仲良くしてくださいね。
あなたを異世界に送るにあたり、いくつかプレゼントを用意しました。
一つ目はアイテムボックスです。
アイテムボックスはいろいろなものを収納できる魔法です。
ひとまず当面の資金と備品を入れておきました。
武器もあるので、早めに装備してください。
二つ目は言語能力です。
この世界の言語での読み書きができるようにしておきました。
いろいろな種族がいますので、積極的に話しかけてみてください。
動物や魔物とは喋れないので、ご注意を。
また、転生させるにあたって肉体年齢を二十歳まで若返らせました。
普通の人族より身体能力も少し高くしておきましたので、悪しからず。
最後になりますが、同行者として我が眷属シルに加え、もう一名追加しました。
元の世界のサトーさんの愛猫が、あなたから離れたくないとのことです。
ぜひ、可愛がってあげてください。
では、この世界でいい縁がありますように。

おお……神様、いろいろなものを用意してくれたんだ。あとで確認してみよう。

でも、その前に。
「……ミケ、こっちにおいで」
「はーい、お兄ちゃん」
シルとじゃれていた少女を呼び寄せ、尋ねる。
「ミケは、俺があの猫カフェから引き取ったミケなのか？」
「そうだよ、お兄ちゃんがいつも撫でてくれた佐藤ミケだよ！」
やっぱり、あのミケだったんだ。
いつも俺と散歩したり、ベッドで寝たりとべったりだったが……まさか転生先にまでついてくるとは。
一緒に来てくれたのは嬉しいけど、念のため確認しておかないと。
「これからは大変な暮らしになるけど、ミケはいいのか？　好きなアニメももう観られないし、危険なことだってあるかもしれないよ」
魔物がいる異世界なのだから、トラブルだって多いだろう。
もしミケに危害が及ぶようなら、彼女だけはなんとか神様にお願いして元の世界に戻してもらわなくては。
「大丈夫だよ！　お兄ちゃんと一緒なら、ミケはどこにだって行けるよ！」
そう言ってミケはニッコリ笑い、俺の胸に頭を擦りつけてきた。
これは、腹を括るべきかな？

「わかった。一緒に頑張るか！」
「はーい！」
俺が頭を優しく撫でると、ミケは再び満面の笑みを浮かべた。
さて、ここでもう一人の同行者にも確認しなければならないことがある。
「いろいろあってスルーしていたが、どうしてシルは俺と喋れるんだ？　オオカミだろ？」
【我は神の眷属ゆえ、念話が使えるのだ。主人をはじめ望む者には、声を聞かせることができる。我としては主人が認めた者以外に語りかけるつもりはないが】
見知らぬ猫耳少女のインパクトに負けてスルーしていたが、いきなり大きなオオカミが喋ったら普通はビックリする。
俺たちの様子を怪訝そうに見ていたミケが、シルに尋ねる。
「ねえ、シル。ミケともお話しできる？」
【もちろんだぞ。我は、ミケとも話がしたい】
「やった！　シルとお話しができて嬉しいよ！」
ミケはニコニコしながらシルの首にぎゅっと抱きつき、シルも尻尾をぶんぶんと振った。
転生に際して猫獣人にしてもらったというミケと、神の眷属である白狼のシル。
種族こそ違うが、二人ともとても仲良くできそうだ。
【我は鼻が利くゆえ、地球に下りていた頃からいろいろな匂いを嗅ぎ分けることができた。主人は優しい匂いで、ミケは元気な匂いがする。転生しても変わらんな】

「ミケは、いつでも元気いっぱいだよ！」
シルは嗅覚が優れているだけでなく、相手の感情を匂いで感じ取ることができるらしい。
神様の眷属って、本当にすげえな。
「さて、神様がアイテムボックスにいろいろ入れてくれた。中に何が入っているか見てみよう」
シルとミケがじゃれている間に、俺は持ちもの確認を始めた。
おっ、アイテムボックスの中身を知りたいと念じたら、目の前にリストが出てきたぞ。
なになに……まずは百万ゴールドがチャージされたカード型魔道具。どうやら俺専用だ。
ゴールドはこの世界の通貨の単位らしいが、日本円と比べてどのくらいの価値なんだろう。
しかし、本人専用のクレジットカードみたいなものにお金がチャージされているのか。技術が日本よりも進んでいるぞ！
衣類や下着一式もあり、きちんとミケのぶんも入っている。これは助かった。
町に着いたら、ミケにもいろいろ買って可愛く着飾らせてやりたい。
他にも毛布や落ち着いた色味のテント、包丁や鍋などの料理道具に各種食材まであるのか。
野外で過ごすこともあるだろうし、テントはかなり助かるぞ。
成人した男が五、六人は余裕で入れるくらいの広さがありそうだから、ミケとシルが一緒でもまったく問題ない。
ついに俺のソロキャンプ技術が活かされる時が来たようだ。
あとすごい量の武器がリストアップされている。魔物がいるなら充分に対策をしないと。

俺は日本刀がいいのかな？
うーん、どうやって取り出せばいいのかな？　唱えてみるか？
「日本刀、取り出し」
おっ、何もなかった俺の手に日本刀が現れた。
それなら「日本刀、収納」と唱えたらしまえるのかなと思ったら、そう考えた瞬間、日本刀が自動で収納された。
いちいち言葉にしなくても、頭の中で念じればアイテムの出し入れができるのか。
アイテムボックス、本当に便利だな！
「ねえねえ、何をしているの？」
アイテムボックスからいろいろなものを出し入れしていると、シルにじゃれついていたミケがこっちに歩いてきた。
「アイテムボックスの中身を確認していたんだ。いろいろ入っていたよ。服とか食料とか、武器もある」
「わあ、武器!?　ミケも武器を持ちたい！」
ミケはアイテムボックスに何が入っているか興味津々だが……さすがに刃物を持たせるのは危なくないか？
【主人、ミケにも武器を装備させたほうがいいぞ。我は強いから問題ないが、ミケは素手にさせないほうがよかろう。獣人は人族より身体能力が高いからな。そのうえ転生者であるミケは、結構強

いのだ】
「えっへん！」
シルがそう言っている中、ミケはドヤ顔で腰に手を当て、ない胸を張っている。
うーん、シルが言うなら大丈夫なのかな。
とはいえ、本人にちゃんと聞いてみよう。
「ミケ、本当にいいんだな？　危なくないか？　戦闘は俺やシルに任せてもいいんだぞ？」
「大丈夫だよ！　まったく、お兄ちゃんは心配性だなあ。どんな武器があるのか見せて！」
逆に、プリプリしているミケに言い返されてしまった。
ミケの身長で使うとなると……ダガーやナイフといった刀身が短い武器か。
とりあえず、アイテムボックスから出してみる。
「武器がちっちゃいよ。もっと大きいのはない？」
えっ、これで駄目なの？
仕方がないので、確認を兼ねてアイテムボックスにある武器をあるだけ全部出してみた。
うわあ、すごい種類だなあ。
西洋の剣が何振りもあるし……こっちは鞭か？
「あっ。ミケ、これがいい！」
「……本当にそれにするのか？」
「うん、これがいい！」

いろいろ吟味していたミケが指差したのは、なんとでっかいバトルハンマー。
小柄なミケの背丈よりも大きく、俺も持ち上げるのに一苦労した重量のある得物だぞ。
そう思っていたのに、ミケは片手でヒョイとバトルハンマーを持ち上げ、ぶんぶん振り回し始めた。
あれっ、俺の目の錯覚かな？
【獣人は幼いうちから力持ちで、しかも神によって体を作られたミケは獣人の中でも特別な存在だ。あの程度軽いものだろう】
「……解説ありがとうございます、シルさん」
【どういたしましてだ】
思わず敬語になってしまったが、いまだに目の前の光景が信じられない。
「ミケ、もういいだろう。バトルハンマーを片付けるぞ」
「はーい！」
ミケからバトルハンマーを返してもらい、アイテムボックスにしまう。
もう一度手にして改めて思ったが……よくこんな重いものを振り回せるなあ。
ミケの怪力に驚きつつ、とりあえず町を目指そうとアイテムボックスから地図を取り出した。
日本にいた頃に見たものに比べるとだいぶアバウトとはいえ、ある程度であれ周辺の様子がわかるのはありがたい。
おっ、現在地に印がつくのか？　これは便利。

今の位置がここだから……
「うん。実はさっき馬車が通りかかったんだが、それが向かった方角に大きな町があるみたいだ。まずは、そっちに行ってみよう」
【了解だぞ】
「町に行くんだね、やった！」
シルとミケの了解を得て、俺たちは街道を歩き出した。
アイテムボックスにいろいろ入っているので、今日中に町に着かずとも大丈夫。
気温は暖かくて風も強くない。歩くにはちょうどいい気候だ。
「ふんふんふんふーん！」
ミケはよくわからない鼻歌を歌いながら、機嫌よくスキップしている。傍から見ていてとってもほっこりするし、可愛い。
シルも、尻尾をゆらゆらさせ機嫌がよさそうだ。
街道沿いには結構大きな川が流れていた。休憩時にはみんなで川の中を覗き、のんびりゆっくりと歩いていった。

街道を行く馬車にミケがブンブンと手を振ったりしているうちに、日が傾いてきた。
今日は、ここらで野宿をしよう。
「シル、ミケ。そろそろ野営の準備をするぞ」

【わかったぞ、主人】
「わーい、お兄ちゃんとキャンプだ！　ミケ、人のキャンプごはんを食べてみたかったの！」
そういえば、ミケとは元の世界で一緒にキャンプに行ったもんな。まさかそんなことを考えていたとは。
【うむ、あのあたりがよいのでは？】
「おっ、シルはさすがだな！　平べったくていい場所だ」
シルが街道から逸れたところにある、テントを張るのにちょうどいい場所を見つけてくれた。
どことなく均されている感じがするから、前に来た誰かが使ったのかな。
「シルはこのあたりを警戒してくれ。ミケはシルのそばで焚火用の小枝を集めてくれるかな？」
【任せろ】
「小枝集めは、ミケにお任せだよ！」
シルたちが動いている間に、俺はテント張りと晩ごはんの支度だ。
ふふふ、何を隠そうこの俺は、ソロキャンプの達人だ！
ああ、可愛い女の子とキャッキャしながらキャンプしたかったなあ……
ささっとテントを立てて、まずは寝床の確保。
神様が用意してくれたテントはポール型の大型だったが、設営しやすくてとても助かる。
おっ、ランタンも入っているぞ。
なになに……ここを押せば明かりがつく魔道具なのか。

テント設営に格闘すること二十分、本日の寝床が完成！
そこに、ミケが枝をたんまりと抱えて戻ってきた。
「よいしょ……枝を集めたよ！　うわあ、大きなテントだね！」
「お帰り。いっぱい枝を集めてくれてありがとう」
「わーい、褒められた！」
俺は嬉しそうなミケの頭を撫でてやり、枝を集めてくれたお礼をした。
こうなると、シルとミケのためにも晩ごはんは腕を振るわないと。
「二人とも、晩ごはんは何がいい？」
「【肉！】」
二人の元気なリクエストに応えて、今晩のメニューはお肉メインにしよう。
アイテムボックスの中にお肉は……っと、いろいろな種類が入っているな。
とりあえず、今夜は薄切りの牛肉でハンバーガーにするか。
シルにはがっつりと、大きなブロック肉を焼こう。
パンが余ったら……りんごもあったから、アップルサンドでも作ろうかな？
しかしながら、アイテムボックスの中の物資の充実ぶりは凄まじい。火をおこす魔道具はもちろん、調味料もいろいろあった。
本当に、神様に感謝感謝。
まずは、近くの川からバケツで水を汲んでこないと。

「お兄ちゃん、手伝うよ！」
……と、ミケが水運びを手伝ってくれたのだが、獣人の怪力恐るべし。
俺より小さなミケが、俺よりはるかに大量の水を入れたバケツを軽々と持つのだ。
ミケに力で負けて、ちょっと凹んだのは内緒だ。
地面に穴を二つ掘って、ミケが持ってきてくれた枝を入れる。そして、ライターみたいな魔道具で着火。
頃合になったら、片方はやかんでお湯を沸かして、もう片方には網を載せて調理開始。
まずは、シルのために肉をガンガン焼こう！
取り出したブロック肉を俺とミケ用に薄く切り、残ったものを塊のまま網の上で焼いていく。
すでにミケとシルは涎を垂らし、尻尾を振りながら待っているぞ。
やかんの中のお湯が沸いたら、いったんやかんを横に置き、今度はフライパンの登場。
そして先ほどの薄く切った肉を焼き始めた。
ほどよく焼けたら焼き肉のタレで味をつける。アイテムボックスに焼き肉のタレまで入っていて、本当に助かった。
肉をいったん皿に移し、フライパンを軽く洗って今度はパンを焼いていく。
パンに焦げ目がついたところで、焼き肉のタレで味つけした肉とレタスとトマトを挟む。これで、なんちゃってハンバーガーの完成。
お次はリンゴを切って、砂糖と一緒に焦がさないように焼いてパンで挟んで……アップルサンド



の完成！
シルのお肉も火が通ったので、これで準備万端。
飲み水は、川の水になる。お腹を壊さないように、先ほどのやかんのお湯を冷まして使おう。
目の前に料理を並べる頃には、ミケとシルはお腹をぐーぐーと鳴らしていた。待ちきれないと、揃って尻尾をぶんぶん振り回している。
「「【いただきます！】」」
まずはなんちゃってハンバーガー。うん、急いで作ったわりにはよくできている。
肉を焼き肉のタレにつけただけなのに、いつになくおいしい気がした。
「お兄ちゃん、と～ってもおいしいよ。おかわり！」
【うん、とってもうまいぞ。いい焼き加減だ！】
二人が笑顔で食べてくれたし、アップルサンドも大好評。
いつもはソロキャンプだったけど、こうして話し相手がいて一緒に食べたからよりおいしく感じるのかな。
おいしそうに食べる二人を見ながらの、あったかい夕食だった。
ちなみに、作った料理はどうもアイテムボックスに収納可能らしい。なんちゃってハンバーガーとアップルサンドは、作り置きをしまっておくことにした。
念のためにさっき煮沸した水も、水筒に詰めてしまっておく。
水はアイテムボックスに入れても問題ないようだ。タイミングを見て、煮沸しておきたい。

驚いたことに、アイテムボックスに入れたハンバーガーは取り出してみると熱々だった。
もしかしたら、中に入れたものは時間経過しないのかもしれない。
夕食の後片付けをして、今日は早めに就寝だ。
本当は風呂に入りたいが、今夜はテントの中でタオルを濡らして体を拭くだけにした。
ミケの体も拭いてやると、ちょっとくすぐったそうに身をくねらせていた。
今日はミケのリクエストで、みんなで川の字になって寝ることに。
夜になっても気温は高かったが、念のためミケにタオルケットをかけてやった。
眠たいのか、すでに船を漕いでいる。
【我がいれば、魔物の気配はすぐにわかる。主人は安心して寝るがよい】
なんとも頼もしいシルの言葉に、ここは甘えよう。
ふと見ると、ミケが可愛らしい寝息を立てている。
さっきの食事でも思ったけど、やっぱり誰かと一緒ってのはいいなあ。
そんなことを思っていたら、ミケがぎゅっと抱きついてきた。
俺はなんだか温かい気持ちのまま、眠りについたのだった。

❖ † ❖

ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

小鳥の鳴き声と朝日の眩しさで目を覚ますと、まだ見慣れないテントの天井が見えた。
ちらりと横を見ると、ミケが俺にぎゅっと抱きついて寝入っていた。微笑ましい光景だ。
「そっか、俺は昨日いろいろあって異世界に転生したんだっけ……」
愛猫が人型になっている姿を見て、改めて実感した。
【うん？　起きて早々、何をブツブツ言っているんだ？】
すでに起きていたシルよ、独り言だ。ツッコミはなしだぞ。
「うーん、おはよー。ねむねむ……」
そうこうしているうちに、ミケが目を擦りながらムックリと上半身を起こした。
「ミケ、おはよう。顔でも洗ってきたら？」
「うん、そうするー」
さて、ミケが顔を洗っている間に朝ごはんの準備をしないと。
ミケが持ってきた枝が余っているから、卵でも焼いて……いや……
献立を考えながら、俺は朝食の準備を始めたのだった。

「お腹いっぱい！　フレンチトースト、すごくおいしかったよ。また作ってね！」
【我のぶんもまた作ってほしいぞ！】
ミケとシルにも、朝食のフレンチトーストは大好評だった。やはり、野外で作る料理は一味違う。
俺が笑顔で頷くと、ミケたちは尻尾をぶんぶんと振って喜んだ。

今度は何にしようかなってメニューを考えるのも、料理の楽しみの一つだ。
そんなことを思いつつ、俺は手早く出発の準備を整える。
荷物はすべてアイテムボックスに収納すればいいので、本当に楽チンだ。
「出発するぞ、二人とも」
「おー！」
ミケが元気よく手を上げて、町を目指して旅を再開した。
本日も天気がよく、歩くにはもってこいの陽気だ。
ちょっと寄り道をして景色を見つつ、話をしながらのんびり街道を歩く。
お昼ごはんは昨晩作ったなんちゃってハンバーガーで、川辺に座ってみんなでのんびり食べた。
ミケは物怖じしない性格で、すれ違う旅人にどんどん声をかけていく。
「おばさん、こんにちはー！」
「あら、可愛いらしいお嬢さんね」
すれ違う人と楽しくお喋りしていると、ブラック企業で疲弊していた心身が洗われる気分だ。
冒険者活動がどんなものになるかはわからない。でも、こうしてミケとシルと共にのんびり過ごせるのなら悪い気はしないな。

昼食をとってしばらく歩くと、突然シルが立ち止まり、耳と鼻をひくひくさせて周囲を警戒し始めた。

【むっ、数が少ないが魔物の気配がする。戦闘の準備をしたほうがよさそうだ】
シルがいて本当に助かった。
なんと言っても、ここは異世界。
魔物がいると知らされた今、緊張でドキドキが止まらなくなった。
【主人、我がいる。心配するな】
「ミケもいるから大丈夫だよ！　ハンマーちょうだい！」
二人が声をかけてくれて、少し落ち着く。
アイテムボックスからバトルハンマーを取り出してミケに渡し、俺も刀を準備した。
ガサガサ。
シルが見つめる先の茂みが揺れている。いったいどんな魔物が現れるのだろうか。
「「キシャー！」」
茂みの中から飛び出してきたのはウサギに似た生物だった。鋭い爪と牙がある。
【キラーラビットだぞ。鋭い爪と牙はもちろん、小さい体を活かした素早い攻撃に要注意だ】
シルが、注意点を素早く教えてくれた。
たしかに小さくすばしこそうで、攻撃を当てるのは大変そうだ。
俺は鞘から刀を抜き、正眼に構えた。
シルもいつでも行けるように身を屈め、ミケはハンマーをぎゅっと握った。
キラーラビットは三匹。ちょうど三対三だ。

双方、しばし睨み合い……
「「キシャー！」」
キラーラビットたちが、唸り声を上げて襲いかかった。
ウサギに似ているのに、そういえば鳴き声が全然違う。
シルはキラーラビットを前脚でなぎ倒し、あっという間に倒す。
俺はキラーラビットの攻撃をなんとかよけ、再度刀を構えた。
お互いに距離を取りながら睨み合う。
「ふっ」
短く息を吐き、今度は俺から仕掛けた。
フェイントを入れようと、わざと刀を振りかぶってみせる。
キラーラビットが、その場から大きく飛んで攻撃を回避した。
チャンスだ。
「やあ！」
シュッ、ザシュ。
空中に飛びのいたタイミングを狙い、俺は上段から渾身の一撃を振り下ろした。
避けようがない攻撃をくらい、地面に落ちたキラーラビットが動かなくなる。
【うむ、さすがだぞ】
シルが褒めてくれたが、俺は初めての戦闘を終えてまだ心臓がバクバクだ。

そういえばミケは？　どうなったのだろうか、心配だ。
シュッ、シュッ。
「よっと。ほいっ」
慌てて振り返ると、ミケが器用にキラーラビットの攻撃を避けるところだった。
さすが獣人。身体能力がかなり高く、俊敏な動きだ。
飛びかかってきたキラーラビットに、ミケはバトルハンマーをブンッと一閃。
「いっけー！」
カキーン、場外ホームラン！
キラーラビットは放物線を描きながら思いっきり吹き飛び、飛沫をあげて川に着水。
そのまま沈んで浮かんでこなかった。
「わーい、ミケやったよ！」
【ああ、よくやったな……】」
ミケのあまりの怪力にビックリした俺とシルは、それ以外何も言えなかった。
【他に気配はないぞ。全部倒したみたいだな】
シルが改めてあたりを窺っているが、もう魔物はいないようだ。
はあっと息を吐き、俺はどっかりと地面に座り込む。
「お兄ちゃん、大丈夫？」
「ああ、平気だよ」

そう強がってみたものの、汗はダクダクで心臓はドキドキ。
これが命を懸けた戦いかと思いながら、深呼吸をしてなんとか気持ちを落ち着かせた。
刀を握るのは初めてだったのにうまく戦えたのは、神様のプレゼントによる身体能力向上の効果かもしれない。
【初めての戦いだったのだ。主人はよくやったぞ。これから少しずつ慣れていけばいい】
「お兄ちゃん、かっこよかったよ」
落ち着いたところでシルが声をかけてきて、ミケが満面の笑みで抱きついてきた。
この世界で生きていくのだから、シルの言う通り少しずつ頑張ろう。
「ところでシル、このキラーラビットはどうしたらいいんだ？」
【捌いて食べてもよし、町で買い取ってもらってもよし。とりあえず、アイテムボックスに入れておいたほうがよいぞ。生きていなければ、素材扱いで収納できるはずだ】
シルの言う通り、二匹のキラーラビットはすんなりとアイテムボックスに入った。
ミケが吹っ飛ばしたのは……川の中から捜すのは無理だな、うん。
「さてと。二人とも、もう少し休んだら使った武器を綺麗にして出発しよう」
「はーい！」
【わかったぞ】
しばらく休んで後始末をし、俺たちは町へ向かってまた歩き出した。
最初の戦いが危なげなく戦えるキラーラビット相手で本当によかったと、俺は安堵したのだった。

❖ † ❖

初めての戦闘の翌日も、旅は順調に進んでいた。
ファーストバトル後も何度か魔物に遭遇したが、シルとミケの活躍があって問題なく終わった。
俺もちょっとは慣れたようで、ドキドキはするけどへたり込むほどではなくなってきた。
「今日の晩ごはんはなーに？」
【主人の料理はなんでもおいしいから、毎回期待しているぞ】
ミケとシルは、昼食前なのにすでに晩ごはんに思いを馳せている。
どの料理もおいしいと褒めてくれるので、作るほうもやり甲斐がある。
午前中は試しにアイテムボックスに入っていた釣り竿を使い、川で釣りをしたのだが……思いのほか大漁で、今の俺のアイテムボックスには下処理をした魚がたくさん入っている。
魚をお腹いっぱい食べたいパワーで、ミケが次々と釣り上げたのだ。
功労者である彼女が食べたがっていたわけだし、昼飯は魚料理にしようかな。
昼食を終えて再び歩き出した時、シルが鼻をひくひくさせた。
また魔物かと思ったら、どうも様子が違う。
【これは……前に嗅いだ人の匂いと血の匂いがする。この先へ行ったな】

「前に嗅いだって……もしかして、今までにすれ違った誰かの匂いか？」
【ああ。おそらく、初日に主人が見かけたという馬車だぞ。我が走って十分くらい先にいる】
なんと、異世界生活初日に俺がミケに頬擦りされていた場面の目撃者たちが危険だという。
この世界で会った第一異世界人だ、さすがに見過ごせない。
ピカー、ズゴゴゴゴゴ。
すると突然、シルの体が光り、ひと回り大きくなった。
「わあ、シルかっこいいね！」
ミケは大きくなったシルに大喜びしているけれど、俺は唖然とするばかりだ。
【ふふふ。そうだろう、そうだろう。この姿なら、主人とミケを乗せて走れる。主人は助けに行きたいだろう？】
シルがかっこいいことを言ってくれるが、その前に念のための確認。
「たしかに助けに行きたいが……ミケ、シル、お前たちはいいのか？」
初日に会った馬車は、騎士たちに守られていた。騎士が苦戦する相手となると、それなりの強さの敵だろう。
助けに行って、逆に俺たちが死んでしまっては元も子もない。
「ミケ、大丈夫だよ。いっぱい人助けするよ！」
【我も頑張るぞ！】
二人とも心強い返事をしてくれたので、シルに乗って助けに向かうことにした。

「わあ、おっきいシルの背中は高いね！」
【主人もミケもしっかり掴まっておくのだぞ】
ミケがシルの背中に乗って大はしゃぎする一方、俺はおっかなびっくり跨る。
【では、行くぞ】
ブオン。
シルの掛け声とほぼ同時に、目の前の景色がぶれた。
「わあ、すごーい！　速いはやーい！」
【そうだろう！　振り落とされるなよ！】
ミケはシルの速さに大はしゃぎしている。俺は振り落とされないよう掴まっているのに必死だ。
体感だが、車やバイクよりも速いのでは？
たかが十分、されど十分。
俺はミケのはしゃぐ声を聞きながら、ひたすらシルにしがみついた。
下手な遊園地のアトラクションより、ベルトもなくシルにしがみついている今のほうがずっと怖い。
【もうまもなくだぞ】
時間の感覚などまったくない。シルが声をかけてきたのでそろそろ十分が経つのだろう。
人生でもっとも長い十分間だった……
【そろそろ見えて……むっ、少しまずいか】

「お兄ちゃん、大変！」
シルの念話が聞こえた。何か問題があるのだろうか。
ミケは獣人特有の視力のよさで何かに気がついたらしく、俺にそう訴えた。
俺も目を凝らす。
ようやく見えてきたのだが、俺たちが向かう先では豪華な馬車が結構な数の魔物に取り囲まれていた。
たしかにこれは一大事だ。
さらに距離を詰めると、魔物の姿が明らかになってくる。
馬車の周囲にいるのは……およそ三十体の体の小さなゴブリンだ。
その後ろには、また他のゴブリンの群れと、ひときわ体が大きなゴブリンが一体。
「馬車を守れ！　近づけさせるな！」
「ぐっ、うわー！」
馬車を守るのは八人の騎士で、これではいくら騎士が強くても多勢に無勢だ。
【主人、ミケ、このまま突っ込むぞ！　しっかり掴まっておけ！】
ズドドドド……ドンドンドン！
そう言うなりシルはゴブリンの群れに突っ込み、勢いそのままゴブリンを数体吹っ飛ばした。
馬車を守っていた騎士は、飛び込んできた大きなオオカミにビックリした様子だったが、すぐに我に返ったらしい。

「新手か？　……いや。お前はたしか、猫耳幼女に抱きつかれていた――」
「通りすがりの旅人です！　加勢します！」
何やら人聞きの悪いことを言い出しそうだったので、俺はシルから降りるなり大声で遮る。
「すまない、助かる！」
騎士も今はそれどころじゃないと、意識を切り替えたようだ。
「シルは奥にいるゴブリンの集団とボスを頼めるか？　ミケのフォローも頼む」
【心配いらん、我に任せるのだ】
「お兄ちゃん、ミケは大丈夫だよ！」
シルとミケがすぐに元気よく返事をする。俺はアイテムボックスからバトルハンマーを取り出して、ミケに渡した。
その瞬間、シルがゴブリンに向かって大声で吠えた。
「ウォーーーン！」
威圧を込めた遠吠えの効果は絶大で、ゴブリンたちがボスも含めて思わず怯む。
……俺と騎士たちも、一瞬体がすくんだ。
「いっくよー！」
ゴブリンが怯んだ隙を見逃さず、ミケとシルはゴブリンの群れに突っ込んだ。
シルに跨ったミケは縦横無尽にバトルハンマーを振り回し、シルは鋭い爪でゴブリンを蹂躙していく。

う、うん。あちらは大丈夫だな。
「俺がこっちのゴブリンを引きつけます！」
「すまない、頼む。お前たちも陣形を立て直すぞ」
「「「「はい！」」」」
シルとミケの攻撃に唖然としていた騎士たちは、俺が馬車に近いゴブリンどもの囮になっているうちに隊長格の指示で陣形を整えた。
ゴブリンは俺たちという突然の乱入者に混乱したようだ。
結果的に、五分もかからず形勢逆転した。
人の命が懸かっているというのもあって、俺は夢中になって刀を振るった。
「……よしっ、馬車の周りは片付いたな！」
気がつけば、馬車の周りにいたゴブリンはすべて倒れていた。
シルとミケのほうはどうなっただろう。そう思った時、ドーンッと大きな音が聞こえた。
俺と騎士は顔を見合わせて後ろを振り返る。そこには、ものすごい光景が広がっていた。
「わーい、ボスを倒したよ！」
【ふふん、我にかかればゴブリン程度一捻りだぞ】
「「「「うわあ……」」」」
大量のゴブリンはミケとシルに蹂躙され、すべて息絶えていた。ボスに至ってはおそらくミケのハンマーで吹っ飛ばされたようで、木にめり込むようにして倒れている。

倒れ伏した敵を前に、得意げに巨大ハンマーを掲げる猫耳幼女と白いオオカミ。
二人は全身に返り血を浴びたまま満面の笑みを浮かべていた。
シルはともかく、ミケさんよ。笑顔はとても可愛いのだが、真っ白なワンピースが血で染まったせいでとってもホラーだ。
俺と騎士たちの見解が、一致した瞬間だった。
「えーと。シル、このあたりには他にも魔物が潜んでいるか？」
【いや？　大丈夫だぞ、周囲には何もいない】
俺はシルに周囲の状況確認を頼んだ。
最優先すべきは、この場の安全確認だ。
「ミケ、シル。着替えを出すから、川で汚れを落としてきなさい」
「はーい！」
【わかったぞ、主人】
二人とも了解してくれてよかった。
ミケの可愛いお顔とシルの真っ白な毛は、ゴブリンの返り血で本当に酷い有様だ。これではとても人前には出せない。
二人を川へ送り出すと、隊長っぽい人が俺に話しかけてきた。
「どこのどなたかは知らないが、助かった。隊長として、部隊を代表しお礼を申し上げる」
「いえいえいえ、困った時はお互い様です。あっ、俺はサトーシュンと言います」

「なるほど。サトー殿、本当に助かった……少し失礼する」
シュイン、もわーん。
俺が自己紹介をしたところで、隊長さんがこちらに手をかざす。俺の身体が少し光った。
これは……
「恩人に使用するのは本来失礼なのだが、念のため。善悪の鑑定をかけさせてもらった」
「そうだったんですね。高貴な方を護衛しているのですから、致し方ないかと思います」
「サトー殿はものわかりがよくて本当に助かる。もちろん、貴殿の優しさを疑うつもりはないよ」
俺はチラッと豪奢な馬車を見やる。派手で豪華な装飾が施されたあの馬車に、いったいどんな身分の方が乗っているんだろう。
こうして俺と喋っている隊長さんの鎧にも装飾が施されており、なかなか立派だ。
「ところで、この街道ってこんなにゴブリンが出てくるものなんですか？　田舎から出てきたのですが、ここに来るまでの道中ではあまり強い魔物に遭遇しなかったので」
転生者であることをごまかしつつ尋ねると、隊長さんは首を横に振った。
「いや、普段はとても安全な街道だ。出現する魔物も弱いものばかりで、旅人も歩きやすい。ゴブリンが上位種と共に襲ってくるなんて、ここ数年は聞いたことがなかったんだが……」
なんだかいろいろ気になる状況だが、一つ言えるのはこんな事態は滅多にないということだ。
シルも不思議そうな反応をしていたし、何かが起きたのは間違いなさそうだ。
「お兄ちゃん、お着替え終わったよ！」

「おっとと」
ここで、着替えが終わったミケが正面から飛びついてきた。
うん、いつもの可愛いミケに戻ったな。
シルも綺麗な毛並みになり、元の大型犬くらいの大きさに戻っている。
「おや、お帰り。お嬢ちゃん、とても強いんだな」
「えっへん！」
隊長さんがミケを褒めると、ミケは腰に手を当ててドヤ顔だ。
可愛らしい仕草に、殺伐としていた騎士たちがほっこり和む。
「改めて紹介させてください。この子はミケで、白いオオカミはシル。俺の家族です」
「ミケちゃんとシルか。可愛いのにとっても強い、そしてサトー殿が大好きなのだな」
「うん！」
どうやら隊長さんは、三日前の頭すりすり事件を覚えているようだ。
ミケは元気よく返事をしているが、俺はとっても恥ずかしい。
隊長さんはササッとミケとシルも鑑定していくが、もちろん問題なしだった。
「皆さんはこのあとはどうするんですか？」
「怪我した騎士の手当てをして、ゴブリンの死体の処理をする。幸いにして重傷者はいなかったが、ゴブリンの血の匂いに誘われて他の魔物が寄ってきたら大変だ」
たしかに、他の魔物が現れたら街道を行く旅人が襲われてしまうかもしれない。

「こうして会ったのも何かの縁ですし、俺たちも最後まで手伝います」
「何から何まで申し訳ない。手が足りないので、本当に助かるよ」
俺が返事をする前から、すでにミケとシルはやる気満々だ。
負傷者の手当てと、並行してのゴブリンの処分。
シルが俺にだけ念話で教えてくれたところによると、ゴブリンは利用する部分がなく、討伐の証である右耳と魔石を取ったら、穴を掘って燃やして埋めてしまうらしい。
魔物って魔石が取れるのか。もう少し勉強が必要だな。
「穴掘りは任せて！　お兄ちゃん、地面を掘る道具を貸して」
【ゴブリンの解体と穴に入れるのは、我がやっておこう】
立候補したミケにスコップを渡してやると、彼女はあっという間にザクザクと大きな穴を掘った。
そして、シルもどんどんゴブリンを解体して必要部位を取ったら、ミケが掘った穴の中にポイッとしていく。
……ゴブリンはあの二人に任せよう。
俺と隊長さんは顔を見合わせて頷き合い、無言のまま同意した。
さて、俺は怪我した騎士さんの治療を手伝うとするか。
彼らの怪我はゴブリンの持っていた武器による切り傷や打撲がほとんどで、鎧を着ていたからか骨折までしている人はいなかった。
アイテムボックスの中に入っている消毒薬や包帯を使用し、順次騎士の手当てを進める。

ふふふ、簡易的な治療法を覚えておくのもソロキャンプでは必須の技術だ。
手当てが順調に進み、残すところあと一人になったところで、急に俺の背中のほうが熱くなった。
治療を終えた騎士の皆さんが、背後を見て唖然としている。
そこで俺も振り向くと……
グォォォォ！
「シルすごい！」
そこには、ゴブリンの死体が入った穴に向かって炎を吐いているシルさんの姿が！
おい、シルよ。お前、オオカミなのに火を吐くのかよ。
しかも、三メートル以上の火柱が穴から上がっているぞ。
ミケは炎を吐くシルに大はしゃぎだが、俺は他の騎士さんと同様にポカーンとした。
やがてシルによるゴブリンの焼却が終わり、今度はミケがものすごい勢いで穴を埋め立てていく。
「お兄ちゃん、終わったよ！」
【こちらはすべて片付いたぞ！】
ミケとシルが満面の笑みで報告してきたが、騎士の人と俺はいまだに唖然としていた。
ミケさんにシルさんよ。あんたらすごいよ……
そしてミケは穴掘りの土で、シルはゴブリンを解体した時の血でまたしてもドロドロに汚れた。
「二人ともありがとう。とっても助かったよ。でもまた汚れちゃったから、川で洗ってきな」
「はーい！」

【わかったぞ】
着替えを持って川に向かう二人を、隊長さんと共に苦笑しながら見送った。
ははは……明日はミケの服をたくさん洗濯することになりそうだ。
「やることはすごいのですが、まだまだ子どもで……」
「保護者として苦労はあるだろうが、元気なところがあの二人の魅力だな。討伐部位の回収は我々が行おう」
隊長さんと騎士たちが素材回収を引き受けてくれたので、俺は残る負傷者の手当てに戻る。
それも終わり、これで一段落と思っていたら……隊長さんが俺に一言。
「お館様が、ぜひサトー殿にお礼を言いたいとおっしゃってな。すまないが、お時間をちょうだいできないだろうか。もちろん、鑑定の結果あなたがたの身元は問題ないと伝えてある」
そう言って、彼はちらりと馬車を見た。
もしや何かフラグが立ったか。俺の中で直感めいたものが働く。
「自分たちはただ通りすがっただけですし。礼を言われるほどのことは……」
「お館様は気さくなお方です。サトー殿は言葉遣いも丁寧で、礼儀もしっかりしている。まったく問題ないだろう」
「いやあ、言葉遣いっていうか、緊張のほうが問題で……」
隊長さんはそう言うが、前世では社長に会うだけで緊張していたビビリな俺だ。
ゴブリン退治のほうが、はるかに気が楽だぞ。

「お兄ちゃん～！　着替えが終わったよ」
【我も血を洗い流してきたぞ】
そこへ、二回目の丸洗いタイムが完了したミケとシルがやってきた。
どうやらお偉いさんと会うことになりそうだし、洗って着替えては正解だったな。
「ミケ、シル、馬車の中の人がゴブリン退治のお礼を言いたいんだって。お行儀よくできるかな？」
「ミケ、大丈夫だよ！」
【我も大丈夫だ】
ミケもシルも問題ないとのことなので、俺はしゃがんで頭を撫でてあげた。
二人ともニコニコして、尻尾をブンブンと振っている。
「ははは。いやあ、こんなに可愛いのにあんなに強いとは。お嬢ちゃんは本当にすごいね」
「えへへ、ミケすごいでしょー？」
俺の後ろから聞き覚えのない男性の声がして、ミケが機嫌よく答えた。
……あれ？
そーっと振り向くと、そこには綺麗で豪華な服を着たダンディなナイスミドルが微笑みながら立っていた。
茶髪の短髪をオールバックにし、ちょっとぽっちゃりとした体型。たとえるなら、商人っぽい。
……ああ、もしかしなくてもこの人がお館様？
俺の背中を汗がダラダラ流れていく。

ゆっくり立ち上がり、そしてジャンピング土下座を発動。
「ミケが無礼な口をきいてしまい、申し訳ございません。すべての責任は私めに……！」
「「「ええっ!?」」」
周囲にいる騎士たちが俺の土下座にどよめいたものの、どう見ても相手は貴族様。
タメ口なんて叩いたら、きっと打首獄門に……！
可愛いミケがそうなったら、俺はいたたまれない。
「あの……サトー殿、顔を上げてくれ」
「ほほほ、何か勘違いしているご様子だが、私たちはあなたに助けてもらった身。頭を下げるべきは、こちらのほうです」
隊長さんとナイスミドルに促されて、仕切り直して挨拶することに。
うう、先走った行動をした我が身が恥ずかしい。
「では、改めて。私はこの先の町を治めているバルガス。このたびは魔物を撃退してくれて、本当にありがとうございました」
「俺はサトーシュンと言います。こちらの猫獣人はミケで、白いオオカミがシルです。皆さんがご無事で何よりです」
「いやはや、まったく危ないところでした」
詳しく聞くと、バルガス様はこの先にある町を治める公爵だという。
しかし身分にとらわれない人柄らしく、俺たちにも偉ぶらずに話しかけてくれるいい人だ。

立ち読みサンプル
はここまで

「サトー殿は凄腕の冒険者とお見受けするが……どうしてこちらに？」
「いやいや、俺の実力なんてまだまだです。実は冒険者を目指そうと故郷を出て、この先の町へ向かっていた途中でして」
「おや、そうでしたか。我が町は冒険者ギルドがあり、冒険者も多い。サトー殿にとってはピッタリの場所でしょう」
バルガス様と盛り上がっていると、俺のそばにいたはずのミケとシルの姿が見当たらない。
……と思ったら、後ろから何やら楽しそうな声が聞こえてきた。
「お主らは、強いうえに可愛いのう。毛並みもふわふわじゃ」
「ふふ～、お姉ちゃんありがとう！」
「ほほ、お姉ちゃんとな？　妾には弟も妹もおらぬゆえ、なかなか新鮮な響きじゃのう」
ミケと話し込んでいるらしい少女の声。なんだか言葉遣いや声の響きがやけに高貴な感じがするのは、気のせいだろうか。
そーっと振り返ると、シルクの旅装に身を包んだ、ウェーブのかかった金髪のいかにもお嬢様らしい少女が、ニコニコとミケとシルを撫でていた。
笑顔のミケは、どうやらその子のことをお姉ちゃんと呼んでいたらしい。
えーっと……もしかしてまたやっちゃった？
バルガス様が頬を緩め、少女に声をかける。
「ビアンカ王女殿下も、お気になりますかな？」